

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 5 年 6 月 7 日現在

機関番号：17102

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2020～2022

課題番号：20K01002

研究課題名（和文）第一次世界大戦後の国際関係とチベット外交

研究課題名（英文）The Tibetan Diplomacy and International Society after the First World War

研究代表者

小林 亮介（Kobayashi, Ryosuke）

九州大学・比較社会文化研究院・准教授

研究者番号：50730678

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、第一次世界大戦前後におけるチベット（ダライ・ラマ政権）の外交と軍事を、イギリス・中国との関係を中心に考察した。第一次世界大戦前後、中華民国と対峙した当時のダライ・ラマ政権は、外交や軍事においてイギリスに大きく依存していたことが強調される傾向にある。しかし、本研究では、イギリスの意図とは必ずしも一致しない、ダライ・ラマ政権の軍事行動、外交交渉、条約解釈、さらに政権の対外政策を担った官僚たちの判断や動向を明らかにした。1950年代まで続くチベットの「事実上の独立」状態の持続の背景は、こうしたダライ・ラマ政権自身の意図や論理に即して解明していく必要があるだろう。

研究成果の学術的意義や社会的意義

清朝崩壊後、中華人民共和国に編入されるまでのチベットは、国家の地位に関して法的（de jure）な承認を欠きつつも、ダライ・ラマ政権が内政と外交の実質的な権限を掌握した「事実上（de facto）の独立」状態にあったとされている。本研究は、このいわゆる「事実上の独立」状態の出発点となった第一次世界大戦前後における、ダライ・ラマ政権のイギリス・中国との関係に注目し、特にダライ・ラマ政権による領域確定のプロセスを国際的要因とチベット側に内在する論理の両面から明らかにした。チベットに関する本研究成果は、「帝国」の狭間で国家形成を目指した同時期のアジア諸地域の動向と比較可能な事例となるであろう。

研究成果の概要（英文）：My research discusses the military and diplomatic affairs of the Tibetan government with special reference to its relations with China and Britain before and after World War I. Previous studies often emphasized that during this period, the Tibetan government that confronted the Republic of China, largely relied on support from Britain. However, my research examines the decision making process of the Tibetan government and its officials on their military campaigns, diplomatic negotiations, and concluding the treaties, which were not necessarily consistent with British policies on Tibet. My research on the Tibetan government's own motives, ideas, and policies will shed a new light on how "de facto independence" of Tibet would last till the 1950s, when Communist China annexed Tibet.

研究分野：歴史学

キーワード：チベット 中華民国 清朝 ダライ・ラマ政権 東チベット イギリス 第一次世界大

### 1. 研究開始当初の背景

近年、第一次世界大戦（1914-1918）の開戦・和平から百年の節目を契機に高まった関心を背景に、第一次大戦の世界史的意義を論ずるための様々な研究成果が登場した。なかでもアジアの諸民族・諸地域の歴史は、民族自決主義・国際主義（国際協調主義）・社会主義など、大戦後に大きな影響力を持った世界的思潮と不可分であったこともあり、特に日本・中国・朝鮮などの動向は格別に重要な事例として検討されてきた。

第一次世界大戦以後の世界史は、チベット史にとっても極めて重要な時期に当たる。研究史上、チベットが「事実上（*de facto*）の独立」状態にあったとされる時代（1913-1951）と、大きく重なるからである。しかしながら、第一次世界大戦および戦後の国際秩序の変化がチベット史にもたらしたインパクトについては、我が国の学界において議論されることは皆無であった。清朝（1636-1912）の崩壊以降、チベットは、ダライ・ラマ政権がチベットの外交と内政の実権を掌握しつつも、その確固たる政治的地位と領域を備えた国家として法的（*de jure*）な承認を受けることなく、一九五〇年代まで存立し続けることになった。未決のチベット問題をめぐる交渉と相克の過程は、その出発点となった、第一次世界大戦前後の政治的・社会的変動との関連に留意しつつ再検討しなければならないだろう。

### 2. 研究の目的

本研究は、第一次世界大戦後の国際関係とチベットの動向をとりあげ、高い史料価値を持ちながらも従来十分に利用されてこなかったチベット語外交文書を活用し、「事実上の独立」状態にあったと言われる 20 世紀前半における、チベットの政治・外交の実態を明らかにすることを旨とする。特に、(1) イギリス・中国・チベットによるシムラ会議（1914）決裂以降の三者間の交渉と相克の実態、(2) 第一次世界大戦後のアジア諸地域で、同時継起的に影響を持った、民族自決主義・国際協調主義・社会主義などの思想・原則・運動の現れを、チベットの動向（政治・外交・軍事行動）に即して検討し、チベットの近代を、アジア史、さらには世界史の中に位置付けようとするものである。

### 3. 研究の方法

本研究の研究方法は、従来十分に活用されてこなかった、第一次世界大戦前後のダライ・ラマ政権の対外関係に関わるチベット語文書史料、そしてイギリス・中国・日本などが残した外交文書を用い、チベットの政治的地位と領域という二つの問題をめぐる、ダライ・ラマ政権の政策決定・外交交渉・軍事行動の過程を明らかにし、新たな近代チベット政治外交史像を学界に示すものである。

上述のような資料と視角に基づき、主に以下のような研究を実施した。①第一次世界大戦期に発生した中国とチベットの境界紛争（1917-1918）とその和平合意の成立過程を、特にチベット・イギリス間の交渉過程に注目しつつ考察した。②イギリス・中国・日本などとの交渉において重要な役割を担った、ダライ・ラマ政権の「外交官」の経歴と活動の実態を明らかにする研究を行った。③20 世紀前半のイギリス・チベット関係の展開に大きな影響を与えたシッキム王国とその王族たちの動向を、新たに整理・公開されたチベット語文書史料などを用いて検討した。②・③の研究は、(2) に記した当初の研究計画の中心的課題ではなかったものの、Covid-19 の流行にともない、欧州・米国での調査が困難になったことから、実現可能な代替案として取り組んだものである。これら三つの研究成果と、前科研（17K13552）の成果を合わせ、単著執筆の準備を進めた。

#### 4. 研究成果

##### (1) 調査研究の内容と学術的意義、主要成果の概要

如上の①の研究課題である中国・チベット境界紛争（1917-1918）は、ダライ・ラマ政権が東チベットの中国軍からの領域奪還に成功した戦いであり、「事実上の独立」維持にとって極めて重要な意味を持つ出来事として知られる。しかし、従来の研究は中国・英国の外交交渉のみに関心を注ぐ傾向にあり、チベット側の判断や動機は等閑視される傾向にあった。

本研究は、The National Archives（ロンドン）所蔵のチベット語文書史料を利用して、ダライ・ラマ政権の軍事行動と外交交渉の経緯を詳細に検討し、英・蔵間で合意に至ったシムラ条約（1914年）に対して、ダライ・ラマ政権がイギリスとは異なる条約解釈を施し、軍事行動と領土の奪還を正当化していったことを明らかにした。当時のチベットの外交・軍事はイギリスへの依存という側面から説明されることが多いが、実際にはダライ・ラマ政権自身の判断や論理が、戦争と外交交渉の推移を規定していたこと、ダライ・ラマ政権による、イギリスの予測・意図を超えた領域奪還・拡大へと繋がったことを明らかにした。なお、紛争の和平合意はチベット問題をめぐるイギリス・中国・チベット間の包括的協議へとつながる可能性を有していた一方で、第一次世界大戦後の中国ナショナリズムの高まりの中で、協議再開への途が閉ざされていったことも指摘した。この内容は2020年度九州史学会東洋史部会にて報告を行った。

②の研究成果としては、ヒマラヤ・チベット学のオンライン・データベースである *The Treasury of Lives: A Biographical Encyclopedia of Tibet, Inner Asia, and the Himalaya* に、近代チベットの対外関係に関わった二名の人物について、英語による伝記を寄稿した。まず、中英蔵シムラ会議（1913-1914）のチベット代表であったシャタ・ペンジョル・ドルジェ（c.1860-1919）の軌跡を明らかにし、20世紀初頭にイギリス・チベット関係が緊密化していく過程で彼が果たした役割を論じた。続いて、1911年から翌年にかけて日本に滞在した経験を持つ高僧ツァトゥル・リンポチェ（1880-1957）を取り上げ、彼が近代日本・チベット関係において果たした役割のみならず、帰国後、ダライ・ラマ13世の側近・使節として清朝崩壊後の対中交渉にて成果をもたらしたことや、のちの社会主義体制下における学術的・文化的事績を論じた。

③チベット仏教を信奉するヒマラヤの小国シッキムは、ヒマラヤ・チベット地域の中でも早期に大英帝国の支配秩序に組み込まれた地域・国家であるが、一方で、シッキムの人々はインド経由にていち早く近代世界と接したこともあり、同時代の南アジアの思想的・宗教的潮流に接する機会も多く、ダライ・ラマ政権と英領インドの関係を、政治・文化・思想・言語など多方面において媒介した。本研究はシッキム王国王子スィーキョン・トゥルクとダライ・ラマ13世の注目し、後者のインド滞在（1910-1912）の背景に、スィーキョン・トゥルクを結集軸とする世界的なブッダガヤ復興運動のうねりがあったことを明らかにした。この成果は、台湾で開催された「内亞與海洋：明清中央檔案、地方文書及域外史料國際研討會」において報告を行った。さらに、イギリスによる鉄道網・航路網・通信網の整備を通じて、シッキムがインド・ヒマラヤ交通の幹線ルートに変貌し、チベット・ヒマラヤ仏教圏内外の移動の結節点になったこと、このアジアにおける「交通革命」が20世紀前半のダライ・ラマ政権の対外関係の発展やチベットにおける新たなエリート層の台頭をもたらしたことなどを明らかにし、この内容にもとづき、「みんな、ここを通った：戦争・交易・巡礼から見るヒマラヤ交易路の盛衰史」（東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所）と題する会議にて講演を行った。

さらに本研究では、以上の三つの研究成果を、専門的な学会報告や論文投稿のみならず、概説書の執筆、他分野との学術的対話や社会連携事業を通じて、広く学界や一般社会と共有していくことを重視し、『チベットの歴史と社会』（上巻、2021年）、『岩波講座・世界歴史（17巻）：近代アジアの動態—19世紀—』（2022年）、『アステイオン』（98号、2023年、サントリー文化財団）などに寄稿をおこなった。また、九州大学比較社会文化研究院・公開講座「意外な歴史の事実！」（2022年11月）にて、「修猷館出身のスパイ：西川一三のチベット潜入記」と題する講演を行い、戦中・戦後にチベットを旅行した西川一三の軌跡に焦点を当て、九州と「満蒙」・チベットの知られざる繋がりを解説した。

さらに、研究成果の国際的発信として、共同研究を進める“Building Nationalism in Inner Asia: The Empowerment of the Tibetan Revolution in the Early Twentieth Century”(The French School of Asian Studies: EFEO)が主催するワークショップ（2021年3月）にて報告をおこなった。日露戦争・辛亥革命・第一次世界大戦という、アジア史の画期となるそれぞれ出来事に際してチベット・日本関係がどのように展開したのかという問題を、近代日本のアジア主義とチベット側の反応に注目しつつ論じた。また EFEO Kyoto にて開催されたシンポジウム “Approaching the High Plateau from the Archipelago: Tibetan Studies in Japan”(2023年3月)では、近代日本・チベット関係の展開と日本におけるチベット学の形成について、特に歴史学の分野から考察を加え、報告をおこなった。

## (2) 今後の展望

今後は、前科研「近代チベット外交史の基礎的研究」（17K13552）と本科研の内容をまとめ、『近代チベット政治外交史：清朝崩壊にともなうチベットの政治的地位と境界』と題する日本語の単著を本年度中に刊行する予定であり、研究成果公開促進費（23HP5080）の支援を受けつつ準備を進めている。

研究の国際的発信としては、①の研究成果を、フランス国立科学センター（CNRS）との共同研究 “The Tibetan Army of the Dalai Lamas,1642-1959”のプロジェクトである論集 *The Many Wars of the Ganden Phodrang Government*（仮題）の一部として刊行する予定であり、現在、編集作業が進んでいる。また、③の国際会議「内亞與海洋：明清中央檔案、地方文書及域外史料國際研討會」の成果にもとづく論集を刊行する計画が、台湾側で進んでいるため、本研究の報告内容も論文としてまとめ、寄稿する予定である。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計6件（うち査読付論文 2件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 小林亮介	4. 巻 98
2. 論文標題 チベットの歴史的論理：自治と独立	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 アステイオン	6. 最初と最後の頁 87-99
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小林亮介	4. 巻 17
2. 論文標題 19世紀の清・チベット関係ー境界地域の視点からー	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 吉澤誠一郎編『岩波講座 世界歴史17 近代アジアの動態』岩波書店	6. 最初と最後の頁 210-236
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Kobayashi Ryosuke	4. 巻 -
2. 論文標題 Tsatrul Rinpoche Ngawang Lobzang	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 The Treasury of Lives: A Biographical Encyclopedia of Tibet, Inner Asia, and the Himalaya ( <a href="https://treasuryoflives.org/biographies/view/Tsatrul-Rinpoche-Ngawang-Lobzang/2418">https://treasuryoflives.org/biographies/view/Tsatrul-Rinpoche-Ngawang-Lobzang/2418</a> )	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Kobayashi Ryosuke	4. 巻 -
2. 論文標題 Shatra Peljor Dorje	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 The Treasury of Lives: A Biographical Encyclopedia of Tibet, Inner Asia, and the Himalaya( <a href="https://treasuryoflives.org/biographies/view/Shatra-Peljor-Dorje/9301">https://treasuryoflives.org/biographies/view/Shatra-Peljor-Dorje/9301</a> )	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 小林亮介	4. 巻 74(9)
2. 論文標題 書評 岡本隆司『「中国」の誕生：東アジアの国家形成と翻訳概念』	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 中国研究月報	6. 最初と最後の頁 39-43
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小林亮介	4. 巻 上
2. 論文標題 チベットと近代世界	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 チベットの歴史と社会	6. 最初と最後の頁 122-147
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計7件（うち招待講演 2件/うち国際学会 3件）

1. 発表者名 Kobayashi Ryosuke
2. 発表標題 Contemporary Japanese Research Trends in Early-Twentieth-Century Japan-Tibet Relations
3. 学会等名 APPROACHING THE HIGH PLATEAU FROM THE ARCHIPELAGO: TIBETAN STUDIES IN JAPAN (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 小林亮介
2. 発表標題 錫金王子の世界旅行與藏傳佛教的近代
3. 学会等名 内亞與海洋：明清中央档案、地方文書及域外史料國際研討會（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 小林亮介
2. 発表標題 修猷館出身のスパイ：西川一三のチベット潜入記
3. 学会等名 公開講座（比較社会文化研究院）「意外な歴史の事実！」
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 小林亮介
2. 発表標題 20世紀前半におけるチベット・インド交易の展開とカリンパン
3. 学会等名 みんな、ここを通った：戦争・交易・巡礼から見るヒマラヤ交易路の盛衰史（招待講演）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Kobayashi Ryosuke
2. 発表標題 Tibet-Japan Relations after the Russo-Japanese War (1904-1905): Tibet's Encounters with Meiji Japan
3. 学会等名 ANR Project Building Nationalism in Inner Asia: The Empowerment of the Tibetan Revolution in the Early Twentieth Century (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 小林 亮介
2. 発表標題 シッキム王国とチベットの近現代
3. 学会等名 「インド世界」の形成 - フロンティア地域を視座として -
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 小林亮介
2. 発表標題 第一次世界大戦期のイギリス・中国・チベット関係 東チベット境界紛争（1917-1918）を中心に
3. 学会等名 2020年度九州史学会東洋史部会
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

<p>The Tibetan Army of the Dalai Lamas, 1642-1959  <a href="https://tibarmy.hypotheses.org/">https://tibarmy.hypotheses.org/</a></p> <p>Treasury of Lives  <a href="https://treasuryoflives.org/">https://treasuryoflives.org/</a></p>
--

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関		
フランス	[国際共同研究] フランス国立科学研究センター (CNRS)		
米国	[国際共同研究] Treasury of Lives		
フランス	フランス国立科学研究センター (CNRS)		
米国	Treasury of Lives		